

帝京大学
教職センター年報

第11号

2024年3月

帝京大学教職センター

帝京大学
教職センター年報
第11号

2024年3月

帝京大学教職センター

目次

論文

- 小学校入学に向けた保護者と学校の接続に関する一考察
—新入学児童保護者説明会資料の見直しと情報発信の工夫—
..... 齋藤嘉一・福島健介 (3)
- 若手教員の力量形成に向けた校内研究体制の検討
—公立A小学校の取り組みを事例として—
..... 齋藤嘉一・佐藤高樹・山村豊 (17)
- 児童の実態に即した実践による「相手の発言を受けて話をつなぐ」力の変化
—小学校2年生「そうだんにのってください」を通して—
..... 坂本喜代子・山崎龍一 (35)
- 学生は、「小学校理科実験」で何を学んだのか 阪本秀典 (47)
- 島しょ地区における高等学校教育の課題と今後の展望
—東京都立八丈高等学校「やろごんプロジェクト」を総括して—
..... 増 渕 達 夫 (57)
- 小学校授業における1人1台端末・クラウド活用のメリット
—意見の共有・集約場面での活用に焦点化して— 森 一 平 (75)
- 教職課程における初年次教育の改善・充実
—A大学1年生の「教職論」を通じて— 山 田 茂 利 (87)
- 研究ノート**
- キャリア・パスポートを意識した学級活動(3)の指導に関する一考察
—東京都内小学校での取組を例に— 佐野匡・藤井芳子 (103)
- 保健体育科球技(バレーボール)指導におけるエコロジカル・アプローチの視点を導入した
部活動指導への応用 —高等学校男子バレーボール部員の意識変化から—
..... 篠原政一 (115)

特集

- 教員採用選考試験対策第Ⅱ期学習会・教師力養成講座……市川 洋 (129)
- エール会・バトンタッチ会、アドバイス会、しゃべり場・入職前学習会
……………井上 靖 (130)
- 教員採用選考試験対策第Ⅰ期学習会・再チャレンジ
……………喜多野 雅司 (131)
- 大学推薦学内選考・教員採用選考試験情報……………立澤 比呂志 (132)
- 東京教師養成塾・彩の国かがやき教師塾……………西久保 律子 (133)
- 帝京大学OB・OG教職の会・教員採用選考試験学内説明会
……………前川 潤 (134)
- 教職学生のための新しい教科書等提供システムの構築に向けた検討と調査
……………松波 紀幸 (135)

資料

- 2023年度教職センター利用状況……………(139)
- 「帝京大学教職センター年報」刊行規定……………(140)
- 執筆者掲載一覧/教職センター年報 編集委員一覧……………(141)
- 編集後記……………(142)

論文

若手教員の力量形成に向けた校内研究体制の検討

— 公立A小学校の取り組みを事例として —

相模原市立作の口小学校 齋藤嘉一
帝京大学教育学部 佐藤高樹
桜美林大学教育探究科学群 山村 豊

<要 旨>

学校の教員不足は深刻な問題であり、本稿が対象とする公立A小学校も例外ではない。同小では毎年度、2名程度の新規採用教員が配置され、教員集団の平均年齢は下がり続ける傾向にある。教員の経験年数の低下は、校務上の問題発生につながる可能性もある。そのため、「学校における働き方改革」は喫緊の政策課題であり、各学校レベルでも早急の対応が求められる。そこで、経験年数の少ない若手教員の力量形成に向けた取り組みの一つとして、校内研究を工夫できないかと考えた。教員にとって授業力向上は第一義的課題である。経験の少ない若手教員一人一人が授業力向上に取り組むためには、いかなる条件整備が必要かつ有効かを明らかにする必要がある。その手立てとして同小の校内研究について教員にアンケート調査を実施し、具体的な方向性について考察した。結果として、昨今の教員の多忙化によって校内研究に費やす時間を確保することは難しい状況であることから、各教員の問題意識にしたがって校内研究を合理的に再構成する必要があることが明らかになった。

<キーワード>

学校経営 校内研究（研修） 新規採用教員（初任者） 若手教員

1. 問題と目的

現在の学校は、教員の多忙化が顕著であり、その解消は学校経営上喫緊の課題である。教員本来の職務である、教材研究や児童との関わりに費やす時間を捻出できない状況がある。かつては先輩教員から若手教員に対して、実践的知識や技能などをインフォーマルな場や機会を通して伝達・継承することができていたが、現在はそのような時間を十分に確保することもできない状況にある。

日々、学習指導をはじめ、児童指導や保護者対応等、様々な業務に追われる状況下でも、教員の資質能力の向上を図るため、実践経験の少ない新規採用教員（初任者）等若手教員の力量形成を職場での校内研究を通して図っていくことは急務である。2015年12月の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」では、現職研修の改革項目の一つとして「継続的な研修の推進」を掲げられ、その具体的方策の一つとして「校内研修リーダーを中心とした体制づくりなど校内研修

推進のための支援等の充実」「メンター方式の研修（チーム）の推進」を挙げている。

筆者（齋藤）がかつて校長として在籍したS市立A小学校（以下、A小）もまた、昨今の一般的な学校と同様、多忙化による限られた時間の中で、経験年数の少ない初任者や若手教員の力量形成が急務であった。特に、A小の場合、全国公立小学校の本務教員の平均年齢が42.6歳（2022年度学校教員統計調査,2023）であるのに対し、同小は平均年齢36.5歳（2022年度）であり、6年の隔たりがあった。また、A小の学級担任の平均年齢は33.1歳、すなわち、教員採用後10年余の経験年数（中堅教諭等資質向上研修該当前後）にすぎない。経験年数だけで、教員としての指導力や人としての成長を見ることはできないが、十分な経験年数とみることは厳しい。

以上の状況をふまえ、A小では2021年度から校内研究の活用を図るとともに、校務分掌の改革、教員2～3年目の教員を中心とした放課後サークル的な場の設定などを通し、若手教員の育成を図ってきた。

本稿では、2020～2022年度の3年間を中心にA小の校内研究の取り組みを提示するとともに、その効果を検証するために同小教員に対して行ったアンケート調査の結果を分析する。そして、その分析結果に基づき、同取り組みの問題点と今後の検討課題について考察する。

2. 校内研究の取り組みの概要

2.1. 2021年度までの部会

政令指定都市に所在するA小は、児童数623名、教員数25名、学級数23の大規模校である。校内研究組織として全体会の下に3つの部会を設け、研究を進めてきた。3部会は次のとおりである。

○スタンダード部

学習・生活・テストをもとにした授業実践と考察

○アンケート部

アンケート・学力調査型テスト・業者テストの結果を分析し、それをもとにした授業実践と考察

○秘密のポケット部

学習に関するルール（A小スタンダード）を土台にし、各教科の特性や学級経営、教材・教具の活用など、専門的な視点から授業実践・公開とその考察

それぞれの部会の所属教員については、各学年で割り振りを行った。各部会で授業提案を行い、全体会承認、部会協議という流れで研究を進めた。

2.2. 部会運営をめぐる課題

A小学校は校務分掌を総括教諭（主幹教諭）と担当教員による担当制としており、いわゆる経営部会を設けていない。そのため、校務分掌に係る検討のための時間と人員を効率化し、その分を校内研究の時間にあてることができた。各部会では、他学年の教員と教材研究をはじめとして、指導案づくりや教材研究に取り組むことが可能であった。だが一方で、同僚との協議の時間を十分に確保できないことが最大の課題であった。

2.3. 教員の経験差の課題

2021年度の学級担任の平均年齢は31.8歳であり、経験年数が10年未満の教員が多い状況であった。授業研究のための学習指導案検討を行うにあたり、そもそも指導未経験の単元等が多く、研究を深めるためには、まず教材や題材等の理解をすることが必要であった。加えて、同小が定める学習に関するルール（A小スタンダード）や授業の大まかな進め方等にも沿いながら、研究を進めることになる。学級経営や、児童の生活指導・学習指導、保護者対応にも時間がかかるため、とりわけ若手教員には日々の授業の準備にかかる時間の確保が困難な状況にある。

2.4. 各担当の課題

①研究主任

2021年度の研究主任は、経験年数12年目の教員が担当した。同小教員の当時の平均年齢より3歳上であり、中堅教員の位置付けである。学級担任と併せて学年主任をしながらの担当であり、特に、空き時間を多く確保するなどの配慮はできない状況であった。そのため、個人の能力に頼るところが大きかった。

②研究副主任

研究副主任は、経験年数16年目の教員が担当した。研究の推進と併せて、通常の学級に在籍している「読み書き」に課題のある児童に対して、効果的な指導方法の一つである「多層指導モデル：MIM (Multilayer Instruction Model)」^[1]の担当として、低学年で重点的に指導を行えるように条件を設定した。

③研究推進委員

2021年度の研究推進委員（以下「委員」という）は、研究主任、研究副主任、各部長（3部会）、教務主任、管理職が運営にあたった。研究主任を中心に、計画的に研究を進めることができたが、経験の少ない教員に対して、十分な支援はできなかった。

2.5. 2022年度の取り組み

①部の廃止と新たなグループ

テーマ・課題別に組織されていた前述の3部会を廃止し、新たに「1・6年グループ」「2・3年グループ」「4・5年グループ」の3グループを組織し、研究を進めることとした。各小学校で便宜上多くの学校で取り入れているのは、低学年（1・2年）、中学年（3・4年）、高学年（5・6年）という括りであろうが、それでは検討できなかった、2年から3年、4年から5への接続を考える場が必要であるとの本校での実践上の課題が見えてきたからである。

②研究推進委員の指名と活用

2021年度までは各学年で互選としていた委員を管理職が指名し、また、同委員を校務分掌

に位置付けることとした。指名については、できるだけ経験の少ない教員が担当できるよう、他の校務分掌担当との兼ね合いを見ながら行った。また、上記①のグループに推進委員の偏りがないように配慮した。

また、委員を指名制としたことによって、研究推進委員会での協議の場を委員一人一人の力量アップとなるようにしたいと構想した。また、学校現場の多忙化によりインフォーマルな場で学ぶ機会が少ないことから、同委員会の意図的な活用を考えた。

③3グループ（1・6、2・3、4・5）と3グループ（赤・白・青）の活用

上記①の3グループは、グループ内での授業研究について検討し、全体に授業公開し、提案を行うものである。一方、公開した授業についての協議は、それとは別に3グループ（赤・白・青）を編制した。できる限り全学年の教員が交流し、多様な意見が交わされる協議の場を設定するためである。A小は、通常学級が各学年3クラスあることから、各学級担任を赤・白・青の各グループに編制した。

2.6. インフォーマルな場の存在

さらに、経験年数が2～3年の教員を中心に、放課後の時間を活用して、日々の悩みを共有し合う場を設定した。自主的な集まりのため、勤務時間外で行っているが、若手教員のみならず、中堅・ベテラン世代の教員が参加することもあり、日々の活動から生じた指導上の悩みや課題等について気軽に話し合う、インフォーマル・コミュニケーションの場となっている。特に初任者にとっては、日々学びにくい児童理解・学級経営に関わる実践の見識を学ぶ貴重な場となっていると推察する。

3. 実証的検討

3.1. 調査の目的

本章では、前述の校内研究体制のもとでの各

世代教員の意識や校内研究の取り組みの効果を検証する。

A小では、2020年度から3年計画で校内研究に取り組んできた。3年目となる2022年度について、経験の少ない若手教員にとって、校内研究で培うことのできる内容等を検討するために「校内研究に関するアンケート」を実施した。ここでは、この質問紙調査で、2022年度のグループ及びベテラン・中堅層の教員と経験の少ない若手教員の相違について検討する。

3.2. 調査方法

①調査対象者

A小の管理職を除いた定数教員男女25人で、年齢は20歳代8人、30歳代12人、40歳代以上4人、無回答1名であった。また、教職年数は1～3年が4名、4～6年が7名、7～9年が4名、10～12年が2名、13年～15年が5名、16年以上が3名であった。

②調査時期

調査は、2022年11月25日～12月9日に実施した。

③調査方法

調査の目的・結果の活用方法及び個人情報の保護等についての説明文を配付し、調査対象者

表1 アンケートの質問項目とコーディング

| 項目 | 質問文 | 選択肢（コーディング） | | | |
|-------|--|-------------------|--------------------|---------------------|----------------------|
| | | 1・6年グループ (1) | 2・3年グループ (2) | 4・5年グループ (3) | |
| 1 | 所属したグループは、選択肢のうちどれですか。 | | | | |
| 2 | 所属したグループは、研究をどの程度進められましたか。 | 十分取り組めた (4) | ある程度 取り組めた (3) | あまり取り組 めなかった (2) | まったく取り組 めなかった (1) |
| 3 (1) | 所属したグループで「指導案づくり」についてどの程度学びましたか。 | 多くを学べた (4) | ある程度学べた (3) | あまり学べなかつ た (2) | 全く学べなかつ た (1) |
| 3 (2) | 所属したグループで「授業づくり」についてどの程度学びましたか。 | 多くを学べた (4) | ある程度学べた (3) | あまり学べなかつ た (2) | 全く学べなかつ た (1) |
| 3 (3) | 所属したグループで「教科指導法」についてどの程度学びましたか。 | 多くを学べた (4) | ある程度学べた (3) | あまり学べなかつ た (2) | 全く学べなかつ た (1) |
| 4 | 校内研究における学ぶ時間について、どのよう に感じましたか。 | 十分時間があつた (4) | ある程度時間が あつた (3) | ほとんど時間が なかつた (2) | 全く時間が なかつた (1) |
| 5 | 所属したグループについて、どの程度課題が あると思いますか。 | 全く課題がない (4) | ほとんど課題が ない (3) | 少し課題がある (2) | 多くの課題がある (1) |
| 6 (1) | 校内研究を進めるにあたり「研究テーマ」が どの程度重要だと思いますか。 | とても重要である (4) | やや重要である (3) | あまり重要でない (2) | 全く重要でない (1) |
| 6 (2) | 校内研究を進めるにあたり「研究組織」がど の程度重要だと思いますか。 | とても重要である (4) | やや重要である (3) | あまり重要でない (2) | 全く重要でない (1) |
| 6 (3) | 校内研究を進めるにあたり「研究授業」がど の程度重要だと思いますか。 | とても重要である (4) | やや重要である (3) | あまり重要でない (2) | 全く重要でない (1) |
| 6 (4) | 校内研究を進めるにあたり「指導案作り」が どの程度重要だと思いますか。 | とても重要である (4) | やや重要である (3) | あまり重要でない (2) | 全く重要でない (1) |
| 6 (5) | 校内研究を進めるにあたり「研究時間の確保」 がどの程度重要だと思いますか。 | とても重要である (4) | やや重要である (3) | あまり重要でない (2) | 全く重要でない (1) |
| 6 (6) | 校内研究を進めるにあたり「外部講師の招聘」 がどの程度重要だと思いますか。 | とても重要である (4) | やや重要である (3) | あまり重要でない (2) | 全く重要でない (1) |
| 6 (7) | 校内研究を進めるにあたり「研究に関する研 修の実施」がどの程度重要だと思いますか。 | とても重要である (4) | やや重要である (3) | あまり重要でない (2) | 全く重要でない (1) |
| 7 (1) | 校内研究で「教科指導」について、どの程度 身に付けたいですか。 | とても身に 付けたい (4) | 比較的身に 付けたい (3) | 身に付ける必要 はない (2) | 全く身に付ける 必要はない (1) |
| 7 (2) | 校内研究で「学級経営」について、どの程度 身に付けたいですか。 | とても身に 付けたい (4) | 比較的身に 付けたい (3) | 身に付ける必要 はない (2) | 全く身に付ける 必要はない (1) |
| 7 (3) | 校内研究で「研究内容」について、どの程度 身に付けたいですか。 | とても身に 付けたい (4) | 比較的身に 付けたい (3) | 身に付ける必要 はない (2) | 全く身に付ける 必要はない (1) |

個々人の承諾を得たうえで、Google フォームを利用して調査を実施した。(別紙参照)

④分析対象・質問項目

配付したアンケート用紙はすべて回収されたが、グループに所属していない調査対象者が1名、年齢を問う質問に対して無回答だった調査対象者が1名いた。このため、以下の分析では質問項目によって有効回答数が異なることになった。使用した質問項目と選択肢、コーディングは、表1の通りである。また、各質問項目に対して、回答の理由等の記入を求める自由記述欄を設けた。また、質問項目の量的分析には統計解析ソフトウェア SPSS Statistic ver.21 for Windows (日本アイ・ビー・エム東京) を用い、自由記述のテキストマイニングにはフリー・ソフトウェア KH coder (樋口, 2020) を用いた。

3.3. 調査結果と考察

①質問項目の量的分析

a. 基本統計量

校内研究の3つの所属グループ「1・6年グループ」「2・3年グループ」「4・5年グループ」における各質問項目の基本統計量を算出し、グ

ループ間の一元配置分散分析を行ったところ、表2のようになった。分散分析において有意あるいは有意傾向があった質問項目は項目7(2)「校内研究で『学級経営』について、どの程度身に付けたいですか」のみであった。このことは、項目4と項目5以外の得点が比較的高かったこと(2.75～4.00ポイント)を踏まえると、前述した2022年度の「1・6年グループ」「2・3年グループ」「4・5年グループ」のグループ再編をはじめとする各種取り組みが適切に作用し、すべてのグループにおいて校内研究の効果が等しく生じたことを意味する。

また、20歳代で教員としての在籍年数が1～6年の8名を「若手群」、30歳代で教員としての在籍年数が4～12年の8名を「中堅群」、30歳代以上で在職年数が12年以上の9名を「ベテラン群」として、これら3つの年齢群における各質問項目の基本統計量を算出し、年齢間の一元配置分散分析を行ったところ、表3のようになった。分散分析において有意あるいは有意傾向があった質問項目は、項目2「所属したグループは、研究をどの程度進められましたか」、項目3「所属したグループで『○○』に

表2 グループ別の基本統計量

| 項目 | 1・6年グループ | | | 2・3年グループ | | | 4・5年グループ | | | 検定 |
|-------|----------|------|------|----------|------|------|----------|------|------|-------------|
| | N | M | SD | N | M | SD | N | M | SD | |
| 2 | 7 | 3.43 | 0.73 | 8 | 3.13 | 0.33 | 9 | 3.44 | 0.50 | <i>n.s.</i> |
| 3 (1) | 7 | 3.29 | 0.70 | 8 | 3.25 | 0.43 | 9 | 3.44 | 0.50 | <i>n.s.</i> |
| 3 (2) | 7 | 3.43 | 0.73 | 8 | 3.50 | 0.50 | 9 | 3.67 | 0.47 | <i>n.s.</i> |
| 3 (3) | 7 | 3.43 | 0.73 | 8 | 3.25 | 0.43 | 9 | 3.44 | 0.50 | <i>n.s.</i> |
| 4 | 7 | 1.86 | 0.64 | 8 | 2.50 | 0.71 | 9 | 2.44 | 0.68 | <i>n.s.</i> |
| 5 | 7 | 2.57 | 0.73 | 8 | 2.25 | 0.43 | 9 | 2.78 | 0.63 | <i>n.s.</i> |
| 6 (1) | 7 | 3.43 | 0.49 | 8 | 3.63 | 0.48 | 9 | 3.78 | 0.42 | <i>n.s.</i> |
| 6 (2) | 7 | 4.00 | 0.00 | 8 | 3.75 | 0.43 | 9 | 3.22 | 0.42 | <i>n.s.</i> |
| 6 (3) | 7 | 3.43 | 0.49 | 8 | 3.25 | 0.66 | 9 | 3.33 | 0.82 | <i>n.s.</i> |
| 6 (4) | 7 | 3.29 | 0.45 | 8 | 3.13 | 0.78 | 9 | 2.89 | 0.87 | <i>n.s.</i> |
| 6 (5) | 7 | 3.71 | 0.45 | 8 | 3.75 | 0.43 | 9 | 3.67 | 0.47 | <i>n.s.</i> |
| 6 (6) | 7 | 3.29 | 0.45 | 8 | 2.88 | 0.60 | 9 | 2.78 | 0.42 | <i>n.s.</i> |
| 6 (7) | 7 | 3.14 | 0.35 | 8 | 2.75 | 0.66 | 9 | 3.00 | 0.67 | <i>n.s.</i> |
| 7 (1) | 7 | 3.71 | 0.45 | 8 | 3.50 | 0.50 | 9 | 3.78 | 0.42 | <i>n.s.</i> |
| 7 (2) | 7 | 3.86 | 0.35 | 8 | 3.13 | 0.60 | 9 | 3.67 | 0.47 | $p<.10$ |
| 7 (3) | 7 | 3.57 | 0.49 | 8 | 3.25 | 0.43 | 9 | 3.44 | 0.68 | <i>n.s.</i> |

表3 年齢別の基本統計量

| 項目 | 若手群 | | | 中堅群 | | | ベテラン群 | | | 検定 |
|-------|-----|------|------|-----|------|------|-------|------|------|-------------|
| | N | M | SD | N | M | SD | N | M | SD | |
| 2 | 8 | 3.75 | 0.43 | 8 | 3.13 | 0.60 | 7 | 3.14 | 0.35 | $p<.05$ |
| 3 (1) | 8 | 3.88 | 0.33 | 8 | 2.88 | 0.33 | 7 | 3.14 | 0.35 | $p<.01$ |
| 3 (2) | 8 | 4.00 | 0.00 | 8 | 3.25 | 0.66 | 7 | 3.29 | 0.45 | $p<.05$ |
| 3 (3) | 8 | 3.88 | 0.33 | 8 | 2.88 | 0.33 | 7 | 3.29 | 0.45 | $p<.01$ |
| 4 | 8 | 2.38 | 0.86 | 8 | 2.25 | 0.66 | 8 | 2.00 | 0.71 | <i>n.s.</i> |
| 5 | 8 | 2.63 | 0.48 | 8 | 2.38 | 0.70 | 7 | 2.57 | 0.73 | <i>n.s.</i> |
| 6 (1) | 8 | 3.63 | 0.48 | 8 | 3.50 | 0.50 | 8 | 3.75 | 0.43 | <i>n.s.</i> |
| 6 (2) | 8 | 3.63 | 0.48 | 8 | 3.75 | 0.43 | 8 | 3.50 | 0.50 | <i>n.s.</i> |
| 6 (3) | 8 | 3.75 | 0.43 | 8 | 3.25 | 0.43 | 8 | 3.00 | 0.87 | $p<.10$ |
| 6 (4) | 8 | 3.25 | 0.83 | 8 | 3.00 | 0.50 | 8 | 2.88 | 0.78 | <i>n.s.</i> |
| 6 (5) | 8 | 4.00 | 0.00 | 8 | 3.50 | 0.50 | 8 | 3.75 | 0.43 | $p<.10$ |
| 6 (6) | 8 | 2.75 | 0.66 | 8 | 3.00 | 0.00 | 8 | 3.13 | 0.60 | <i>n.s.</i> |
| 6 (7) | 8 | 3.00 | 0.50 | 8 | 2.63 | 0.48 | 8 | 3.25 | 0.66 | <i>n.s.</i> |
| 7 (1) | 8 | 3.88 | 0.33 | 8 | 3.63 | 0.48 | 8 | 3.63 | 0.48 | <i>n.s.</i> |
| 7 (2) | 8 | 3.63 | 0.48 | 8 | 3.63 | 0.48 | 8 | 3.38 | 0.70 | <i>n.s.</i> |
| 7 (3) | 8 | 3.63 | 0.48 | 8 | 3.13 | 0.60 | 8 | 3.50 | 0.50 | <i>n.s.</i> |

ついてどの程度学びましたか」のうち (1) 『指導案づくり』、(2) 『授業づくり』、(3) 『教科指導法』のすべて、そして項目 6「校内研究を進めるにあたり『○○』がどの程度重要だと思いますか」のうち (3) 『研究授業』と (5) 『研究時間の確保』であった。一方、項目 4「校内研究における学ぶ時間について、どのように感じましたか」や項目 5「所属したグループについて、どの程度課題があると思いますか」はどの年齢群でも低い (2.00～2.63 ポイント) ことから、すべての調査対象者が校内研究に費やす時間がなく、課題があると感じていたことを示す。また、項目 7「校内研究で『○○』について、どの程度身に付けたいですか」はどの年齢群も高い (3.13～3.88 ポイント) ことから、すべての調査対象者が『教科指導』『学級経営』『研究内容』を身に付けたいと感じていることも示された。

以上の結果から、以下では所属グループの影響は統制されていると判断し、年齢別で有意であった項目 2、項目 3、項目 6 について詳細な分析を行う。

b. 研究の進捗と取り組みの程度 (項目 2)

項目 2 (図 1) について、被験者間一元配置分散分析を行ったところ、5%水準で有意であった ($F(2,20) = 3.79 p = .04$)。そこで、多重比較 (Tukey の HSD 法) を行ったところ、中堅群とベテラン群の間には有意差はみられなかったが ($p = .99$)、若手群は中堅群に比べて 10%水準で有意に高い傾向がみられ ($p = .06$)、ベテラン群と比べても同様であった ($p = .08$)。平均値が総じて高いことを踏まえると、このことは、年齢に関係なく校内研究に取り組んでいるが、その傾向は中堅群やベテラン群に比べ若手群で顕著であったことを示唆する。

c. 学んだ内容 (項目 3)

項目 3 (図 2) の学んだ内容について、年齢×学んだ内容(「指導案づくり」「授業づくり」「教科指導法」)の混合計画二元配置分散分析を行った。その結果、年齢の主効果が 1%水準で有意

で ($F(2,20) = 14.20 p = .00$)、学んだ内容の主効果が 5%水準で有意であったが ($F(2,40) = 3.78 p = .03$)、交互作用では有意ではなかった ($F(4,40) = 1.04 p = .40$)。そこで、まず年齢について多重比較 (Tukey の HSD 法) を行ったところ、中堅群とベテラン群には有意差はみられなかったが ($p = .64$)、若手群は中堅群に比べて 1%水準で有意に高く ($p = .00$)、ベテラン群と比べても同様であった ($p = .01$)。続いて、学んだ内容について多重比較 (Bonferroni 法) を行ったところ、「指導案づくり」と「教科指導法」とでは有意差はみられず ($p = .64$)、「授業づくり」と「教科指導法」とでも有意差はみられなかったが ($p = .13$)、「授業づくり」の方が「指導案づくり」に比べて 10%水準で有意に高い傾向が示された ($p = .08$)。これらをまとめると、平均値が総じて高いことから、調査対象者は年齢の違いに関係なく校内研究の内容をすべて学んでいるが、その傾向は中堅群やベテラン群に比べ若手に顕著で、さらに指導案づくりよりも授業づくりを多く学んでいたことを示唆する。

d. 校内研究で重要と考える事柄 (項目 6)

項目 6 (図 3) について、年齢×校内研究で重要と考える事柄(「研究テーマ」「研究組織」「研究授業」「指導案づくり」「研究時間の確保」「外部講師の招聘」「研究に関する研修の実施」)の混合計画二元配置分散分析を行った。その結果、年齢の主効果では有意ではなかったが ($F(2,21) = 0.62 p = .55$)、校内研究で重要と考える事柄の主効果は 1%水準で有意であり ($F(4,50,94.46) = 11.58 p = .00$)、交互作用においても有意傾向があった ($F(9,00,94.46) = 1.90 p = .07$)。

そこで、校内研究で重要と考える事柄についての単純主効果の検定を行ったところ、「研究授業」と「研究時間の確保」の 2 項目で 10%水準の有意傾向が示された (研究授業: $F(2,21) = 2.72 p = .09$; 時間の確保: $F(2,21) = 3.00 p = .07$)。続いて、この 2 項目それぞれの多重比較を行ったところ、「研究授業」においては若手群と中堅群 ($p = .43$)、中堅群とベテラン群

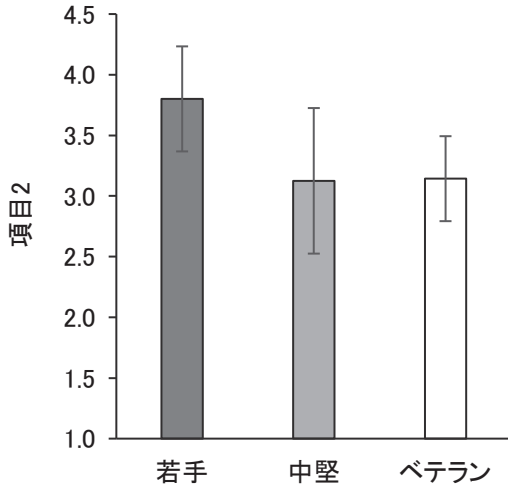


図1 項目1_2「進捗と取り組み」

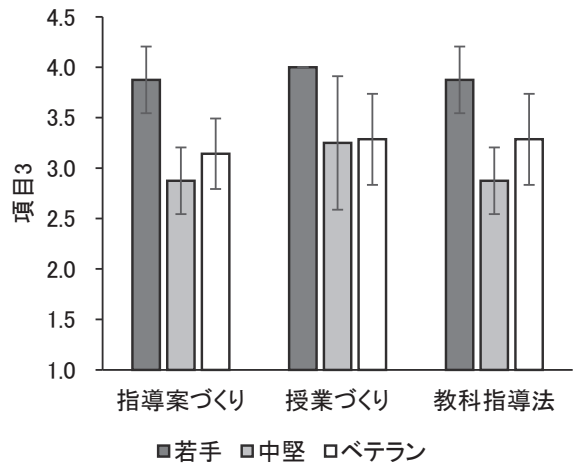


図2 項目1_3「学んだ内容」

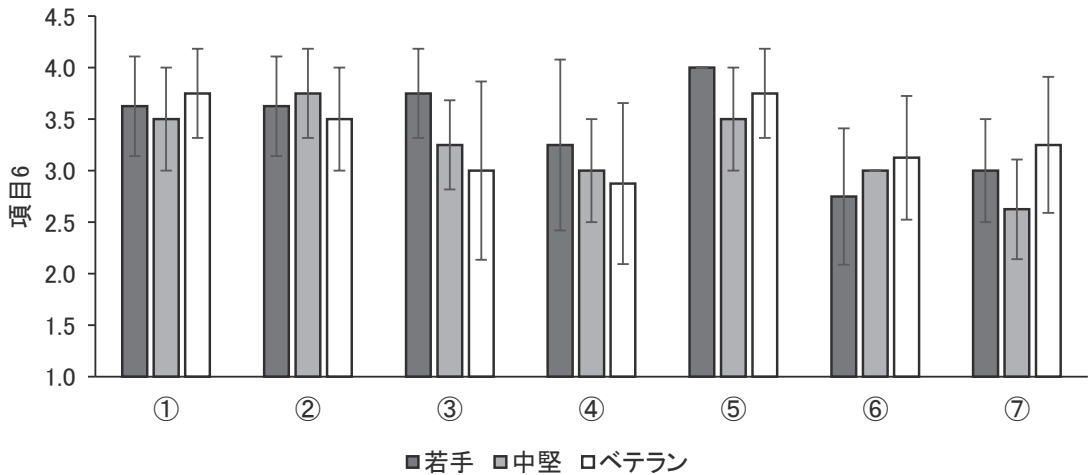


図3 項目1_6「校内研究で重要と考える事柄」

①研究テーマ ②研究組織 ③研究授業 ④指導案づくり
⑤研究時間の確保 ⑥外部講師の招聘 ⑦研究に関する研修の実施

($p=1.00$)には有意差はなかったが、若手群はベテラン群に比べて10%水準で有意に高い傾向があり($p=.09$)、「時間の確保」においては若手群とベテラン群($p=.70$)、中堅群とベテラン群($p=.70$)には有意差はみられなかったが、若手群は中堅群に比べて10%水準で高い傾向が示された($p=.07$)。

以上の「校内研究で重要と考える事柄」の項目において、すべての年齢で平均が高いことから、どの調査対象者も項目6の事柄すべてを重要であると考えているが、それら下位項目の中

でも、若手群は他の年齢群に比べて「研究授業」と「時間の確保」を重要であると考えていることが示唆される。

②自由記述の質的分析

a. 項目2の回答理由

調査対象者が項目2「研究の進捗と取り組みの程度」で回答した理由を選んだ背景を検討するため、それについて記入を求めた自由記述に対して年齢群を外部変数とする対応分析を行った。対応分析(コレスポネンデンス分析)とは、クロス集計などのような行と列からなるデータ

の特徴を視覚化し、関連性をとらえる多変量解析の一つで、特徴のない項目は原点付近に、特徴の大きい項目は原点から遠くに布置されるとともに、互いに関連の強い項目どうしは、原点からみて同一方向に布置される性質がある。その結果、**図4**のようになった。**図4**をみると、下中央部に若手群、中央右部に中堅群、上左部にベテラン群が布置していた。このことから、調査対象者が項目1_2で回答した理由が、年齢群によって大きく異なっていることが示唆される。

原点(0,0)から下中央部方向へ離れて布置されている語として、「児童」「実態」と、「協力」「先生方」などがある。これらの語を用いた実際の回答には「児童の実態を踏まえた上で、単元を組み合わせると児童が主体的に取り組める内容を考えたり、粘り強く活動できる方法を考えることができた」(若手群)や「学年団の先生方が協力してくださったり、多様な意見をくださったりしたことで、研究授業として、成果が出せた」(若手群)があった。一方、中央右部方向に離れて布置している語に「早い段階」「ワークシート」「話し合う」などがあり、これらの語を用いた回答例として「計画的に進め、何度も話し合って、協議するよりもかなり早い段階で指導案だけでなく授業で使うワークシートも配って、十分に検討してもらった時間をとった」(中堅群)があった。また、上左部方向に離れて布置する語に「事前」「研究授業」があり、これらを用いた回答として「計画に沿って研究授業の協議、事前授業、本授業と行うことができたので」があった。さらに、下中央方向と上左部の間に「学年団」、中央右部方向と上左部の間に「計画的」「進め方」「学年」などの語が布置していた。

以上のことから、若手群は児童の実態に合わせた指導方法を考えることができたことや、学年の先生方の協力があつたことが校内研究に十分に取り組めたかどうかの判断の理由であつたと考えられる。一方、中堅群やベテラン群にとつ

ては早い段階から校内研究に取りかかり、計画的に進めることが判断の背景にあることが示唆される。

b. 項目3の回答理由

調査対象者が項目3「学んだ内容(指導案づくり、授業づくり、教科指導法)」で回答した理由を検討するため、その自由記述に対して年齢群を外部変数とする対応分析を行った。その結果、**図5**のようになった。**図5**をみると、中央左部方向に若手群、下中央部方向に中堅群、上右部方向にベテラン群が布置していることから、各調査対象者が項目3で回答した理由が、年齢群によって異なっていることが示唆される。

原点(0,0)から中央左部方向へ離れて布置している語に「生かす」「学ぶ」があり、下中央部方向に「実践」「自分」がある。さらに中央左部方向と下中央部方向の間に項目3の下位項目「指導案づくり」「授業づくり」「教科」がある。これらの語を用いた回答例に「題材を生かしつつ、様々な教科とつなぎ合わせた授業づくりを学ぶことができた」(若手群)や「自分が実践したことのない授業方法や教科の指導法についてたくさん知ることができた」(中堅群)、「授業づくりについて、授業を実践することで見えてくる課題がたくさんあり、解決するための手立てを考えることができた」(中堅群)があった。一方、上右部方向へ離れて布置している語に「話し合う」があり、この語を用いた回答例には「業務が多忙の中で(中略)校内研究で話し合うことができたことがよかった」(ベテラン群)があった。

以上のことから、若手群は校内研究を通して授業づくりや指導案の生かし方を学んだのに対し、中堅群では授業づくりと自身がこれまでに実践してきた教育活動とを関連づけながら省察をしていたと考えられる。一方、ベテラン群は授業づくりや指導案づくりの生かし方を学んだり自身の教育実践と関連させたりすることではなく、教員同士が「話し合う」ことに校内研究

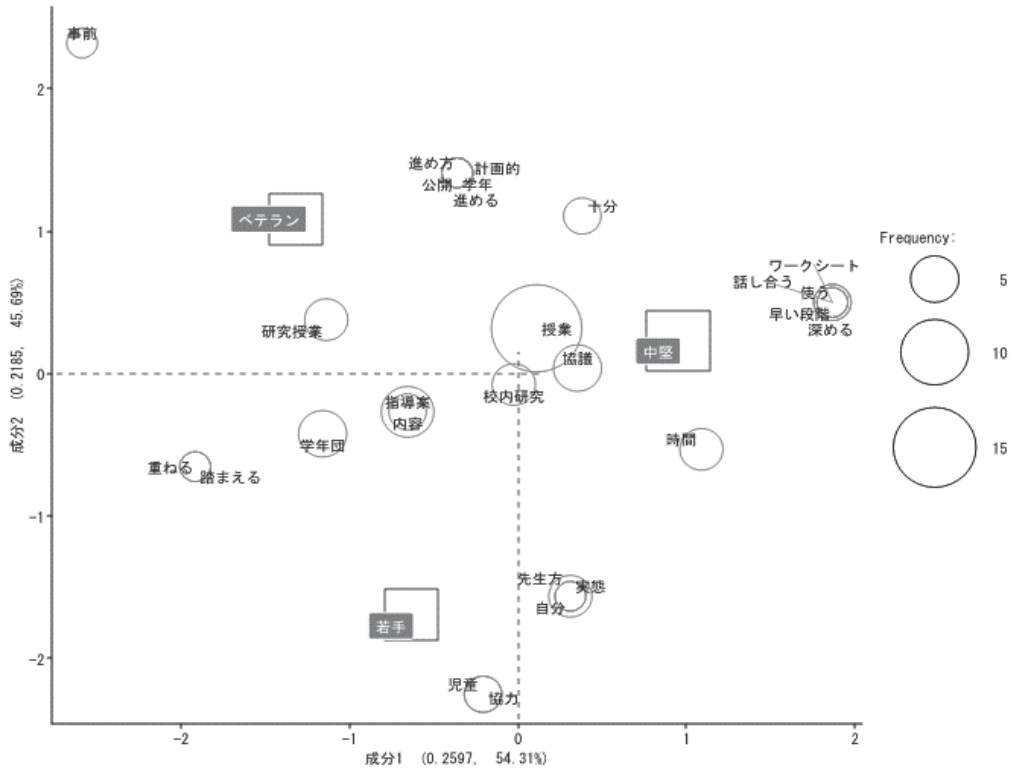


図4 項目1_2の自由記述

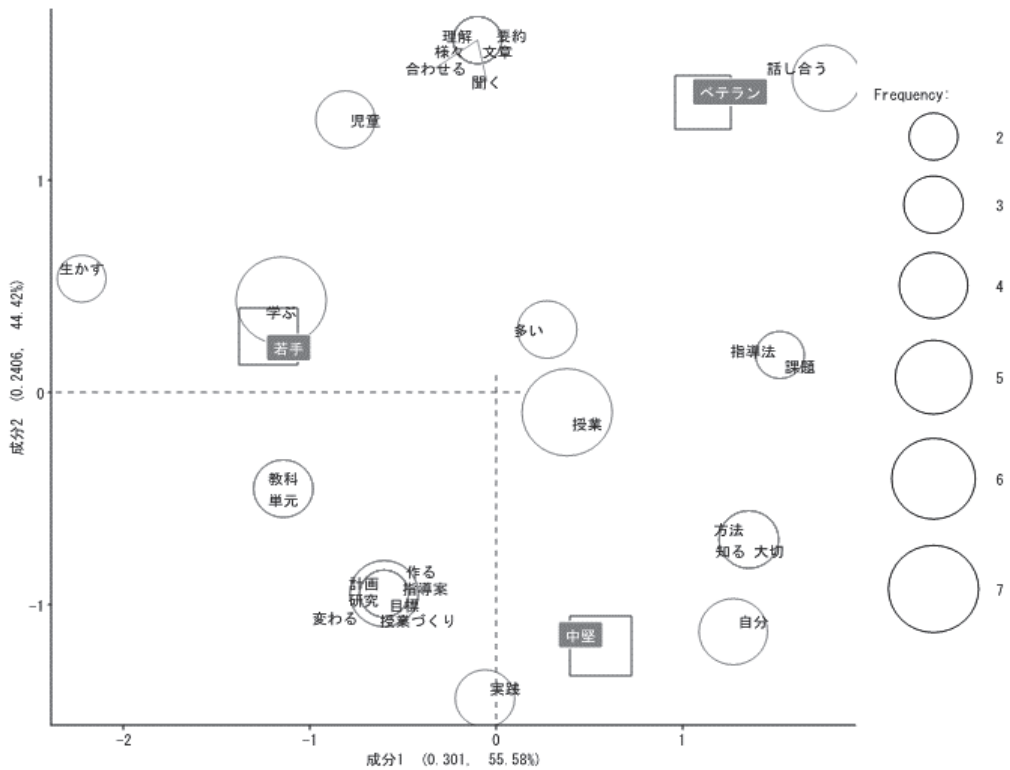


図5 項目1_3の自由記述

の意義を見出していることが示唆される。

c. 項目6の回答理由

調査対象者が項目6「校内研究で重要と考える事柄（研究テーマ、研究組織、研究授業、指導案づくり、研究時間の確保、外部講師の招聘、研究に関する研修の実施）」で回答した理由を検討するため、その自由記述に対して年齢群を外部変数とする対応分析を行った。その結果、**図6**のようになった。**図6**をみると、下中央部に若手群、上右部に中堅群、上左部にベテラン群が布置していた。このことから、項目6に対する回答の理由が、中堅群とベテラン群では若干類似し、それに対して若手群が独立していると考えられる。

原点(0,0)から下中央部方向へ離れて布置されている語として「授業づくり」があり、それより原点に近い位置に「時間の確保」がある。これらの語を用いた実際の回答には「外部講師の方から学ぶことも大切だと思うが、明日からの授業づくりに活かすためには、実際に授業を参観し改善に向けて考える（後略）」（若手群）や「研究テーマとそれを研究する時間の確保が校内研究をよりよくするために重要だと感じたため」（若手群）があった。一方、上右部方向に離れて布置している語に「目的」「グループ」「共通理解」「指導案」があり、これらの語を用いた回答例として「グループによって、準備に差があり、指導案などが間に合わず、授業検討すら中止になったグループもあった」（中堅群）や「研究テーマについては、教員全員が共通理解した上で進めると、授業が考えやすくなると思う。指導案については、学校で形を統一したり簡略化したりして、授業の流れや教材作りなどに力を入れた方がよいと考える」（中堅群）があった。また、上左部方向に離れて布置する語に「研究授業」「先生」「個人」「学校」「実践」があり、これらの語を用いた回答例として「経験年数の浅い先生たちへの学びという視点では、研究授業は重要だと思う」（ベテラン群）、「学校だけでなく、先生個人のレベルを高めるため

にも、様々な考え方を取り入れて実践していくことが必要であるから。ただし、実践するまでに精査（学校・個人）することも大事」（ベテラン群）があった。

以上のことから、若手群にとっては同僚の先輩教員から授業づくりを学び、それを授業実践に生かすとともに、校内研究を充実させるには時間の確保が必要であると認識していることが示唆された。一方、中堅群やベテラン群は、若手教員の育成のためには校内研究が重要であるものの、現状では校内研究を実施するため時間の確保が難しいため、簡素化やテーマの選択などの負担が少なくなるような工夫が必要であるという認識をもっていることがうかがわれる。

d. 項目4の回答理由

以上の分析より、すべての調査対象者で「時間の確保」が大きな課題であるという認識が共有されていたことから、有意ではなかったが、項目4「校内研究における学ぶ時間についてどのように感じましたか」の理由について回答した自由記述に対して年齢群を外部変数とする対応分析を行った。その結果、**図7**のようになった。**図7**をみると、中央右部に若手群、上左部に中堅群、下左部にベテラン群が布置していることから、若手群が独立し、中堅群とベテラン群が若干類似している傾向が示された。

原点(0,0)から中央右方向へ離れて布置されている語として「公開授業」「成績」「重なる」「時期」「準備」がある。これらの語を用いた実際の回答には「公開授業に向けての準備が水泳学習や成績の時期と重なったため、勤務時間の範囲内に行くことは難しかったから」（若手群）があった。一方、上左部方向へ離れて布置している語として「放課後」「作る」などがあった。これらの語を使用した実際の回答には「放課後は、やることがたくさんあるので、授業者になると、勤務時間の外でやるしかありません」（中堅群）、「指導案やワークシートを作る時間は、勤務時間を超えて行うしかない」（中堅群）などがあった。また、下左部方向へ離れて布置し

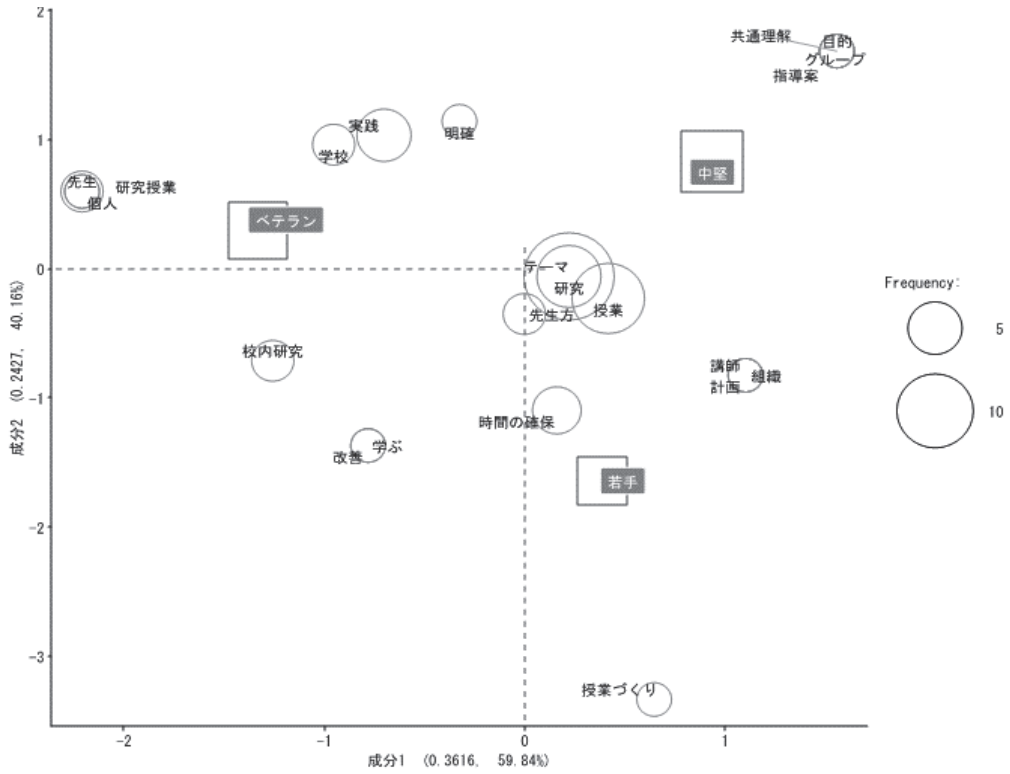


図6 項目1_6の自由記述

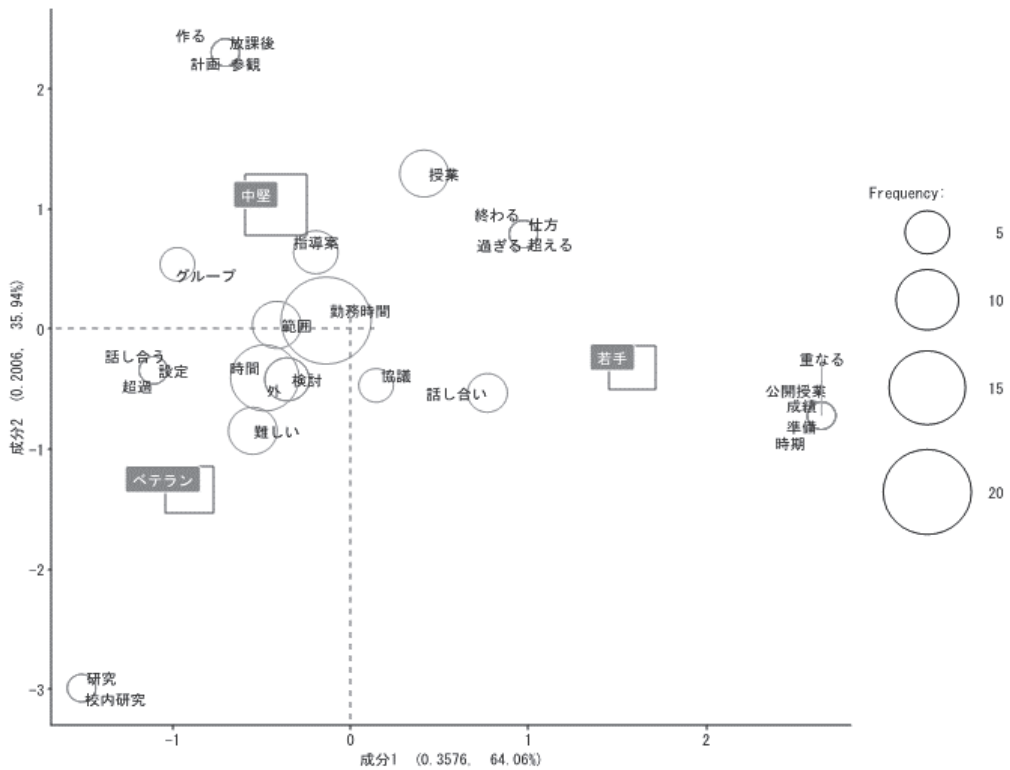


図7 項目1_4の自由記述

ている語として「校内研究」「研究」があった。これらの語を用いた実際の回答に「勤務時間の範囲内では、研究に力を注ぐ時間はほとんどなく難しい」（ベテラン群）があった。

以上のことから、調査対象者はいずれも、校内研究のための時間がなく、勤務時間外で行わなければならないという点では一致していた。その一方、若手群が他の業務との重なりを強調しているのに対して、中堅群とベテラン群では指導案の準備など校内研究そのものの負担を強調している点で相違がみられた。

③量的・質的分析結果の考察とまとめ

a. 校内研究に対する取り組み

項目2「研究の進捗と取り組みの程度」において、若手群は中堅・ベテラン群に比べて校内研究に「十分に組み合わせた」と評価していた。また、自由記述の対応分析から、その理由として校内研究が児童の実態に合わせた実践的な内容であったことや中堅・ベテラン群からの協力があつたことを挙げていた。また、中堅・ベテラン群も項目3及び項目6の自由記述でも明らかかなように、教育実践及び話し合いを重視する傾向をもっており、なおかつ校内研究は若手教員の育成のために必要であるという認識をもっていた。このことから、若手群と中堅・ベテラン群のメンター関係は授業実践の重視という点で結びつき、適切な協力体制が確立していたと推測できる。このことが、若手群が校内研究に十分に組み合わせたと評価した原因であろう。

一方、中堅・ベテラン群においては、自由記述の分析から、早い段階からの準備や計画的な取り組みなど、校内研究を円滑に進められたかどうかの評価の基準になっていることが示された。しかし、項目4の質問項目の結果や自由記述の分析結果からも明らかかなように校内研究の準備に費やす時間が確保できなかったために、若手群に比べ項目2の評価が低下したと考えられる。

b. 校内研究での学び

項目3「学んだ内容」においては、若手群は中

堅・ベテラン群に比べて特に「指導案づくり」と「授業づくり」を多く学んだと評価していた。自由記述の対応分析においても「学ぶ」と「生かす」が特徴的な語として挙がっていたことから、若手群は教科内容の知識のみならず、それをいかに授業の場で生かすか、という実践的見識を学んだと思われる。このことが、項目2における若手群の高評価に結びついたのであろう。

一方、中堅群は校内研究の内容を自身の授業実践に結びつけられることと、ベテラン群は校内研究を通じて教員同士が話し合えることが評価の基準であることが推測できる。校内研究の内容を単に受動的に学ぶのではなく、自身の授業実践に結びつけたり、それについて教員同士で意見を交換したりすることは多くの時間を必要とするため、校内研究のために時間を確保できない状況において、項目3の評価は若手群に比べて低下したと考えられる。

c. 校内研究の重要点

項目6「校内研究で重要と考える事柄（研究テーマ、研究組織、研究授業、指導案づくり、研究時間の確保、外部講師の招聘、研究に関する研修の実施）」において、若手群は「研究授業」と「時間の確保」を特に、重要であると評価していた。また、自由記述においては「授業づくり」と「時間の確保」が特徴的な語として抽出されている。若手群が校内研究において「研究授業」と「授業づくり」を重要であると考えた背景には、若手群自身が「授業づくり」のような授業実践のスキルを身に付けたいと思い、そのためには中堅・ベテラン群などの研究授業を参観したり、自身が行う研究授業を中堅・ベテラン群の先生方に講評してもらったりすることが効果的だと考えているためであろう。このことは、有意ではなかったものの項目7(1)「校内研究で『教科指導』について、どの程度身に付けたいですか」において若手群の得点が最も高いことから裏付けられる。

また、若手群の「時間の確保」については、項目4「校内研究における学ぶ時間について、

どの程度課題があると思いますか」に対する自由記述の対応分析で「重なり」などの語が抽出された結果も併せて検討すると、若手群の経験の少なさゆえに授業以外の業務についても時間を取られているため、中堅・ベテラン群以上に校内研究で「時間の確保」が重要であると評価したのであろう。

一方、中堅群においては、項目6の7つの下位項目のうち有意ではなかったものの最も重要であると評価した項目が「研究組織」であった。前述した項目6の対応分析の通り「時間の確保」のために校内研究のやり方の工夫が必要であると認識しており、また項目2の対応分析で校内研究を円滑に進められるかどうかを評価基準にしていることを踏まえると、中堅群は校内研究のテーマや目的の共通理解、グループ分けなど、組織や運営に着目し、それらによって校内研究の円滑な推進を図ることが重要であると認識していることがうかがわれる。また、ベテラン群は、若手・中堅群に比べ有意ではないものの項目7(1)「研究テーマ」と(6)「外部講師の招聘」、(7)「研究に関する研修の実施」が高いことから、若手群の授業実践のスキルアップ、中堅群の校内研究の組織・運営とは違った、より大局的な観点から校内研究を考えることが重要であると認識していると推測される。

d. まとめ

以上の分析をまとめると、校内研究において、若手群自身も含め、すべての調査対象者は若手の授業実践の指導力育成を大きな目標として認識しており、そこに意義をみいだしている点では共通していた。しかし、そのための方法に若干の相違があり、若手群は中堅・ベテラン群との協力体制や実践的な研究授業に、中堅群は校内研究の円滑な組織運営に、そしてベテラン群は話し合いや研究テーマなどの、より大局的な側面に着目していた。A小における2022年度取り組みは、内容が実践的であり研究組織も協力的であったため、若手群にとっては十分取り組めるものとなった。しかし、昨今の教員の

多忙化もあり、校内研究のための時間を確保することは難しく、そのために若手群だけでなく、中堅・ベテラン群に負担がかかっていたことも明らかとなった。

4. 問題点と今後の検討課題

A小では、学年間の接続を意識した3グループを形成して、研究活動に取り組んできた。各グループで、各教員の授業について率直な意見交換を行う場を設けるなど、研究実践に取り組んできた。これらは、経験年数の少ない若手教員の力量を組織的に形成するための環境づくりとして企図したものである。教員対象のアンケートからは、若手教員の実践的指導力育成という問題意識を共有しつつ、その方法・手段をめぐる認識に各世代での相違がみられた。この各教員の問題意識を有機的に統合する校内研究体制の条件整備が今後の課題として浮き彫りとなった。すなわち、授業の実践的スキルを身に付けたい若手群と教員同士の話し合いと大局的な視点を重視するベテラン群、そしてテーマの共通理解から校内研究の円滑な推進を図ろうとする中堅群というように、それぞれ異なる問題意識が明らかになった。しかし、これらの問題意識は対立的なものではなく、相互に関連している点も多い。そのことから、これらの関連する点を精査したうえで合理的に再組織化することによって、若手教員の力量を形成するための校内研究の条件を整備することが今後の課題となるであろう。

なお、本稿では詳細に検討することはできなかったが、教員の力量形成をめぐることは、職員室での雑談など、インフォーマル・コミュニケーションも重要な効果をもつと推測する。「各教員の問題意識を検討し合えるインフォーマルな関わりを意図的につくる」という視点での校内研究の条件整備と可能性について、今後さらに検討をすすめることとしたい。例えば、伊東らは、東村山市立青葉小学校での「校内研究を育

てる」過程で、研究授業後の協議会にとどまらない、教員間の率直な話し合いと学びのきっかけづくりの場としての「学びカフェ」を立ち上げたことなどについて実践報告し、「こなしていく」パターン化から脱却する新たな校内研究の可能性と課題について考察している^[2]。「その学校ならではの」校内研究と教員文化の創出に向けて、既存の組織運営の改善にとどまらない対話の場づくりを指向した実践研究に今後さらに着目する必要がある。

また、初任者育成のしくみと関わっては、高知県教育センターの『総合的な教師力向上のための調査研究事業～メンター制等による研修実施の調査研究～』^[3]が示すような取り組みが注目される。同研究によれば、効果的なメンター制の実施について「4月当初に2年次教員が初任者に対して研修の心構え等について伝える研修を設定したことで、初任者が安心して教員生活をスタートすることができ有効であった。2年次教員を初任者のメンターとすることで、互いの成長に繋げることができ、若年教員育成に効果的である」としている。組織的な研究体制の検討のみならず、このような日常的な初任者支援の取り組みを参考にすることも有効であると考える。

5. 引用文献・参考文献

5.1. 引用文献

- [1] 海津亜希子・田沼実畝・平木こゆみ・伊藤由美・SHARON VAUGHN (2008) 通常の学級における多層指導モデル(MIM)の効果—小学1年生に対する特殊音節表記の読み書きの指導を通じて. 教育心理学研究,56, pp.534-547.
- [2] 伊東大介・佐藤由佳・山本由紀・三石初雄 (2022) 校内研究を育てる—その学校ならではの学びを求めて—. pp.61-109.
- [3] 高知県教育センター (2017) 総合的な教

師力向上のための調査研究事業～メンター制等による研修実施の調査研究～. pp.1-36.

5.2. 参考文献

- [1] 齋藤嘉一・渡邊春菜・西内一裕 (2021) 校内における多層指導モデル MIM の効果的な導入について—管理職としての視点から. 日本LD学会第30回大会論文集. pp.282-283.
- [2] 樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第2版』ナカニシヤ出版
- [3] 文部科学省 (2021) 令和元年度学校教員統計調査(確定値)
- [4] 文部科学省 (2020) 教師の資質能力向上に関する参考資料
- [5] 文部科学省 (2019) OECD 国際教員指導環境調査(TALIS) 2018 報告書—学び続ける教員と校長—のポイント. OECD 国際教員指導環境調査(TALIS) 2018 調査結果 vol.1. (https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/Others/1349189.htm 2024年1月31日確認)

【別紙：調査票】

校内研究に関するアンケート（お願い）

〇〇小学校長 〇〇 〇〇

このことについて、ご多用の中ご面倒をおかけいたしますが、ご協力くださるようお願いいたします。

このアンケートは、令和4年度（3年計画の3年目）の校内研究について振り返り、令和5年度の校内研究に生かすことを目的とします。アンケートで得られたデータは、研究以外の目的で使用することはありません。また、統計的に処理するため個人が特定されることもありません。

なお、本アンケート結果に基づく報告書を学会等で発表する場合がありますことを申し添えます。

1 令和4年度のグループについて

1-1 あなたが所属したグループは、選択肢のうちどれですか。あてはまるものを選んでください。

- ① 1・6年グループ
- ② 2・3年グループ
- ③ 4・5年グループ

1-2 あなたが所属したグループは、研究をどの程度進められましたか。選択肢のうち、自分の考えにあてはまるものを選んでください。また、選択肢を選んだ主な理由をご記入ください。

- ① 十分取り組めた
- ② ある程度取り組めた
- ③ あまり取り組めなかった
- ④ 全く取り組めなかった

【選択肢を選んだ主な理由】

1-3 あなたは所属したグループで、次の事柄についてどの程度学べましたか。選択肢のうち、自分の考えにあてはまるものを選んでください。また、回答の主な理由をご記入ください。

| | 多 く を 学 べ た | あ る 程 度 学 べ た | あ ま り 学 べ な か っ た | 全 く 学 べ な か っ た |
|-----------------------------|----------------------------|---------------------------------|---|--------------------------------------|
| ① 指導案づくり | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ② 授業づくり | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ③ 教科指導方法 | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ④ その他「多くを学んだ」事柄があればご記入ください。 | [] | | | |

【回答の主な理由】

1-4 あなたは、校内研究における学ぶ時間について、どのように感じましたか。選択肢のうち、自分の考えにあてはまるものを選んでください。また、選択肢を選んだ主な理由をご記入ください。

- ① 勤務時間内に、十分時間があつた
- ② 勤務時間内に、ある程度時間があつた
- ③ 勤務時間内に、ほとんど時間がなかつた
- ④ 勤務時間内に、全く時間がなかつた

【選択肢を選んだ主な理由】

1-5 あなたは、所属したグループについて、どの程度課題があると思いますか。選択肢のうち、自分の考えにあてはまるものを選んでください。また、選択肢を選んだ主な理由をご記入ください。

- ① 全く課題がない
- ② ほとんど課題がない
- ③ 少し課題がある
- ④ 多くの課題がある

【選択肢を選んだ主な理由】

1-6 あなたは、校内研究を進めるにあたり、次の事柄がどの程度重要だと思いますか。選択肢のうち、自分の考えにあてはまるものを選んでください。また、回答の主な理由をご記入ください。

| | とても重要である | やや重要である | あまり重要でない | 全く重要でない |
|------------------------------|--|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| ① 研究テーマ | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ② 研究組織 | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ③ 研究授業 | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ④ 指導案づくり | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ⑤ 研究するための時間確保 | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ⑥ 外部講師の招聘 | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ⑦ 研究に関する研修の実施 | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ⑧ その他「とても重要である」事柄があればご記入ください | <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> </div> | | | |

【回答の主な理由】

1-7 あなたは、校内研究で次の事柄について、どの程度身に付けたいですか。選択肢のうち、自分の考えにあてはまるものを選んでください。また、回答の主な理由をご記入ください。

| | とても身に付けたい | 比較的身に付けたい | あまり身に付ける必要はない | 全く身に付ける必要はない |
|-------------------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| ① 教科指導に関する事柄 | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ② 学級経営に関する事柄 | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ③ 研究内容に関する事柄 | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ④ その他「校内研究で、とても身に付けたい」事柄があればご記入ください | [] | | | |

【回答の主な理由】

2 あなた自身について

2-1 あなたの年代は、選択肢のうちどれですか。あてはまるものを選んでください。

- ① 20歳代 ② 30歳代 ③ 40歳以上

2-2 あなたの教職年数は、選択肢のうちどれですか。あてはまるものを選んでください。

(令和5年3月31日現在)

- ① 1年～3年 ② 4年～6年 ③ 7年～9年
 ④ 10年から12年 ⑤ 13年から15年 ⑥ 16年以上

3 このアンケートに関して、何かご意見があればご記入ください。

アンケートにご協力くださり、ありがとうございました。

執筆者掲載一覧

| | |
|--------------------|-------|
| 相模原市立作の口小学校 | 齋藤嘉一 |
| 帝京大学教育学部准教授 | 佐藤高樹 |
| 帝京大学教育学部教授 | 坂本喜代子 |
| 帝京大学教育学部准教授 | 阪本秀典 |
| 帝京大学教育学部教授 | 福島健介 |
| 帝京大学教育学部教授 | 増渕達夫 |
| 帝京大学教育学部准教授 | 森一平 |
| 府中市立小柳小学校 | 山崎龍一 |
| 帝京大学教職センター・教育学部教授 | 山田茂利 |
| 桜美林大学教育探究科学群教授 | 山村豊 |
| 帝京大学教職センター・教育学部准教授 | 佐野匡 |
| 帝京大学教職センター・教育学部准教授 | 篠原政一 |
| 世田谷区立桜町小学校 | 藤井芳子 |
| 帝京大学教職センター客員准教授 | 市川洋 |
| 帝京大学教職センター客員准教授 | 井上靖 |
| 帝京大学教職センター客員准教授 | 喜多野雅司 |
| 帝京大学教職センター客員准教授 | 立澤比呂志 |
| 帝京大学教職センター客員准教授 | 西久保律子 |
| 帝京大学教職センター客員准教授 | 前川潤 |
| 帝京大学教職センター・教育学部准教授 | 松波紀幸 |

教職センター年報 編集委員一覧

| | |
|-------------|------|
| 帝京大学 教職センター | 山田茂利 |
| 帝京大学 教職センター | 橋本和顕 |
| 帝京大学 教職センター | 松波紀幸 |
| 帝京大学 教職センター | 佐野匡 |
| 帝京大学 教職センター | 篠原政一 |

編 集 後 記

教職センターの事業・研究等の報告書である「帝京大学教職センター年報第11号」をお届けいたします。教職センターでは全学部学科及び教職大学院の教員との協力体制の下、教職センター教員と大学事務職員が協力して、教職課程の充実を図るとともに、教員を目指す在学生・卒業生に対し本学独自の教員採用選考試験対策プログラムにより、総合的にサポートしています。

今年度も、引き続き、全学教職センター会議において、教職課程の充実のため、教職課程に関する協議や、教職課程履修学生への指導、支援及び進路相談などについて情報共有が図られました。

なお、全学の重点事項として取り組んでいる学生の就職支援については、教職課程担当教員の進路相談に資するため、公立学校教員採用選考試験の早期化・複数回実施など各自治体の情報を随時更新しながらに提供を始めました。また、毎年度行っている教職センターの学生支援に関わる事業の見直しについて、その取り組みを「特集」記事として掲載しました。加えて、これまで図書館で貸出業務を行っていた教職関係の資料の一部について、学生の利便性を考え教職センターで貸出が円滑にできるように、バーコードスキャナーを活用した貸出方法についても検討し、特集記事として本号にその内容を掲載しました。

引き続き教職センターが全学的な組織体制の中核としての役割を担い、全学教職センター会議において、教職課程に係る事柄を教職員で協議し、その改善・充実に取り組むことで、教員の養成に係る教育の質の向上に努めてまいります。今後ともご支援・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、ご寄稿いただきました齋藤嘉一先生、佐藤高樹先生、坂本喜代子先生、阪本秀典先生、福島健介先生、藤井芳子先生、増渕達夫先生、森一平先生、山崎龍一先生、山村豊先生には、心から感謝申し上げます。沖永佳史学長先生には、発刊のご理解をいただきましたことを重ねてお礼申し上げます。

帝京大学教職センター年報 第11号

2024年3月31日発行

発行者 帝京大学教職センター
〒192-0395 東京都八王子市大塚359
TEL 042-678-3993
FAX 042-678-3116

印刷所 株式会社相模プリント
〒252-0144 神奈川県相模原市緑区東橋本1-14-17
